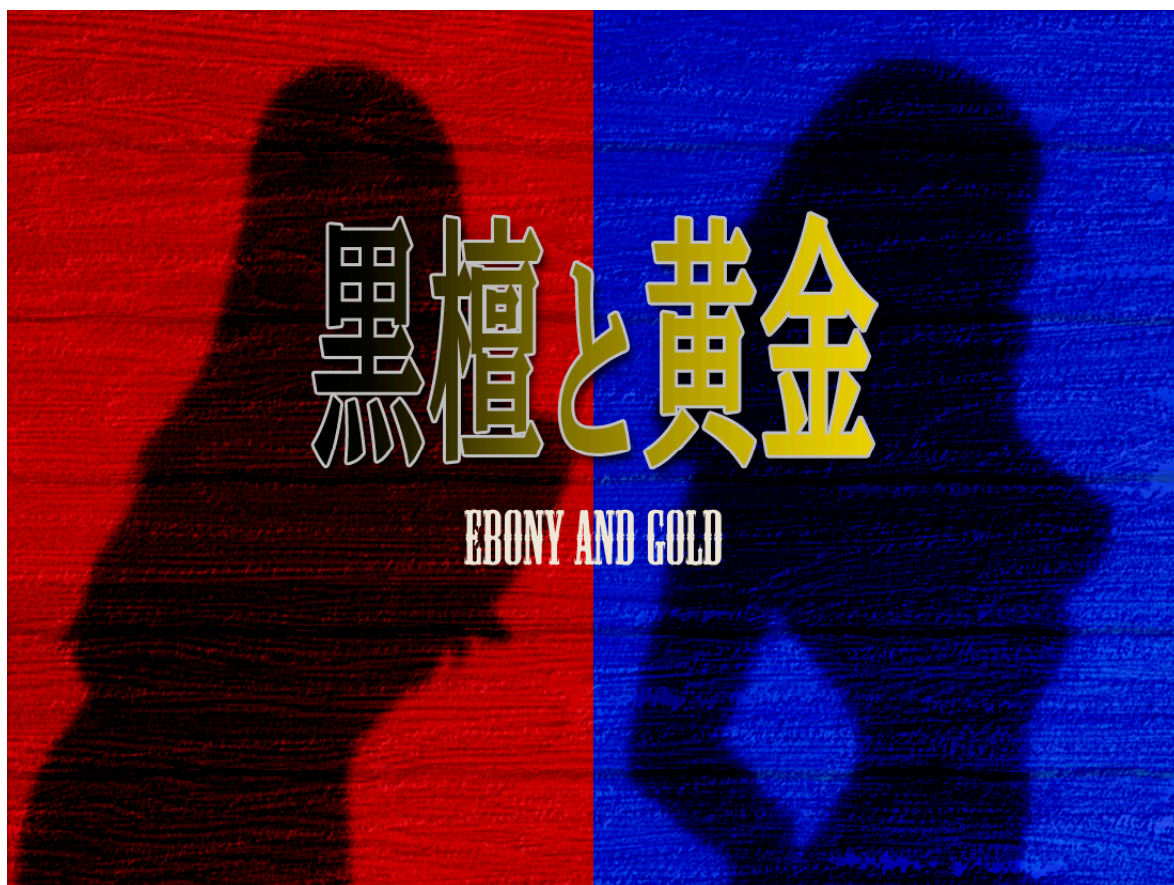




町の入り口には傾いた木の門があった。門柱の上の方に白く乾ききった板が打ち付けられていて、消えかけた文字はどうやら「エルソパルドへようこそ」と書かれているようだった。門扉は片方しか残っておらず、壊れかけた蝶番が荒れ野を吹く風に軋み、侘びしい歌を奏でていた。

やけに広い往来（といっても、石畳も何もない只の乾いた土だが）の両側に古びた木造の家々が並んでいた。色褪せ消えかけた看板には、宿屋や食事処、食料品屋、鍛冶屋、雑貨屋等々、様々な店の名前が読み取れた。だが、店を開けている所はほとんどないようだった。幾つかの開いた窓の中に、干涸びたような年老いた顔が幾つか見えた。懷疑と恐れに満ちた視線を感じたが、私がそちらに目を向けると皆そそくさと窓を閉じた。誰も歩く者もない町に風の音だけが響いていた。

町の真ん中あたりと思しき所に、開いている店があった。かつてはけばけばしい色彩で塗られていたであろう看板には、真ん中に「黒檀と黄金」と大書きされ、左端には黒髪の、右端には金髪の女の姿が描かれていた。下の方には「宿と食事、酒、そして女」という文字が残っていた。

私は疲れた馬を店の脇の厩につなぐと、軋む扉を押し明けた。店の中央は通路であるのか、空けてあり、左右に小振りの円卓が幾つか並んでいた。正面奥には止まり木と帳場があった。左手奥には年代物の大型の風琴、右手奥には二階の、恐らくは客室に通じる階段があった。

店には先客がいた。左右に別れた席に各々五人ばかりの男が陣取り、銅の杯から酒をすすっていた。左側に座った男たちは、みな真紅の布を首や頭に巻いていた。右側に座った男たちはみな青く染めた革胴着を着ていた。どちらの男たちも、内からにじみ出る欲望と暴力で薄汚く脂ぎっているように見えた。

奥の止まり木には誰も座っていなかった。帳場の向こう側には褐色の肌、灰色の縮れ毛の男がいた。灰色の潤んだような目はやけに小さく、口

髭に隠された口元と相まつて、表情が読み取り難い。視線は私の方に向いているようであり、どこにも向いていないようにも感じられた。

私は止まり木の真ん中の席に座った。背中に男たちの視線が集まるのが感じられた。帳場の中の男は歪んだ銅杯を磨いていた。赤金に映る私を見ているような気もした。

「親父、ピンニヤだ。ピンニヤボンデルにできるか」

「無理な話だね、エルパソルドでする話じゃない。ピンニヤがあるだけ幸せだと思いな」

主は私に目を合わせず、凹んだ銅杯に薄い金色の酒を注いだ。

「ああ、まあ、そんな所だろうね。仙人掌に乾杯だな」

主は銅杯に酒を三分の一ほど注ぎ、仙人掌の漬物の欠けらを申し訳のよう添えた。ピンニヤはひどい安物で舌がぴりぴりとした。仙人掌はそう不味くはなかった。

「開いている宿屋はここだけかい」

「そうさね」

「泊めてもらおうか」

主はすぐには答えず、別の銅杯を磨き始める素振りを見せた。

「部屋はあるだろう。とりあえず、一泊分の金はある」

私は懷から銀貨の入った革袋を取り出し、帳場に音を立てて置いた。あまり迫力のある音ではなかったが。

「もう少し金子はあった方がいいだろうな」

「いい儲け話を聞かせてやろうか」

左右からほとんど同時に声がかかった。主は聞こえないふりをしていた。私は銅杯に映る左右の男たちの姿を見た。どちらも大きく歪んで、それでなくとも獣じみた容貌がさらに醜く歪んで見えた。もう一口ピンニヤをすすって、黙っているとまた声がかかった。

「おい、兄さん、金が欲しくはないのかい」

「ここいらじゃ、なかなかいい話はないぜ」

私は主に視線を送ったが、主の視線の行方は知れなかった。

「遠慮しておくよ。ここに長居をするつもりはない。一宿一飯で十分さ。お前さんたちが慈善事業者には見えないしな」

「何だと、この野郎！おう、この町に來たからにやあ、そうは行かねえのさーラスヴィップの旦那につくのか、薄汚え青豚野郎につくのか、はつきりしろ！」

「利いた風な口をきかせやがつて！屍肉食らいの犬野郎につくのか、ブランドイギロン様につくのか、二つに一つだ！」

私は銅杯のピンニヤを飲み干した。喉がひりひりするの、仙人掌の漬物をかじったが、あまり効き目はなかった。

「親父、水をくれ。杯に一杯、それから桶に一杯だ。こいつらの頭を冷やすのに入り用だ」

「何だと、てめえ！ふざけるのもいい加減にしろ！」

「そういうことなら、てめえの死体を役に立てるだけよ！」

左右から剣を抜く音が聞こえた。銅杯に映る歪んだ男たちの手に鈍く光る刃が現れた。左右の男が剣を振りかざすのが見えた。

私は剣を抜き、二人を斬った。抜き様に右手の男の首から肩を斬り裂き、返す刀で左の男の胸を斬り払った。左右から盛大に鮮血が噴き出した。首を竦めたが否応無しに血飛沫が降りかかった。

二人の男は血をまき散らしながら、床の上に顔れた。

「親父、すまん。杯を代えて、水をくれ」

主は黙ったまま無表情に一瞥をくれ、水を注いだ。左右の男たちが騒めき立った。剣を抜く音が幾重にも銜して聞こえた。その音に混じって、酒場の扉が軋んで開く音が聞こえた。女の匂いが足音と共に近づいてきて、私の右隣の席に座った。

「私はコルデよ。あなたは」

コルデと名乗った女は透き通った青い瞳で私を見据えた。少しだけ目を細めて、珊瑚色の唇にしわを寄せ、微笑んだ。そうすれば世界中の男が

平伏すとても、思っているのだろう。

輝くような金色の髪が波打っている。胸の大きく開いた白い服には、赤と黄の砂漠の花が刺繍され、幅広の光る青い繻子の腰帶をきつく締めていた。帯の上下では乳房と尻がそれぞれ前後に大きく突き出していた。

「スナブ・ランケン、旅の者だ」

コルデと名乗った女は「私にもピンニャね」と言っ、主に微笑みかけた。無愛想に差し出された酒杯をあおり、床の上の死体を一瞥した。

「腕が立つのね。ブランディギロンにつきなさいよ、私が口を利いてあげるわ。強い男には金を惜しまないわよ」

金髪の女はそう言っ、私の膝に手を置いた。私は注意深く彼女の白く肉付きの良い手をつかみ、帳場の上に戻した。女はくすくすと笑っ、これ見よがしに乳房を震わせてみせた。

また扉の軋む音がして、足音が近づいてきた。コルデの笑いが止み、冷たい視線が私を通り越して、新しい客に注がれた。足音は私の背後で一度止まった。銅杯に映る歪んだ女の姿は床の上の死体を見ているようだった。女は私の左隣に座った。

「ルッカ、ピンニャをちょうだい」

女は囁くような声で言い、影の濃い大きな鳶色の瞳が私を見据えた。にこりともしなかったが、その視線に男が平伏すと思っているのは、彼女も金髪女と同様だった。

女は差し出された銅杯から一口酒をすすり、不機嫌そうに赤い唇を歪めた。瘦せていて青白い肌をしていた。肌に張り付くような黒い服はあちこちが透かし刺繍になっ、白い肌に絵模様を描き出していた。漆黒の髪に真紅の布で作られた花飾りを刺していた。細い腰帶も真紅だった。

「あなたが斬ったのね、大した太刀筋ね。私はイヴォーン、あなたは？」

黒髪の女は細い指先を私の肩に這わせて囁いた。私は左手で水の入った杯を持ち、注意深く彼女の手を払っ、から答えた。

「スナブ・ランケン、旅の者だ」

「そう、おもしろい名前ね。うちの頭目もおもしろい名前なのよ。ラスヴィップって言うの。この腕なら稼げるわよ。うちに来なさいよ」

私は生ぬるい水を一口飲んだ。右側のコルデという女は残っ、いたピンニャを一気に飲み干した。左側のイヴォーンという女は銅杯を口に運んで静かに傾けた。

「何しに來たのさ、この雌犬！」

コルデが語気鋭く言っ。

「雌豚には関係のないことよ！」

イヴォーンがひどく冷たい声で返した。

蠅の羽音がした。女たちにはひと足遅れたが、蠅たちが死骸の臭いを嗅ぎっ、どこからか飛んできたらしい。

「旦那、どっちに付くか決めたらしい」

主が相変わらず、私の方を見ないままそう言っ。

「この町ではどっちにつくか、決めなきゃいけねえ。そうでない者はざつさと出て行くかだ。でも、旦那はもう斬っ、しまったからな、そうはいかねえな」

「やれやれ、二人斬ったら百人斬る羽目になるのかね」

「旦那が斬られちまえば、それでお仕舞いだよ」

二人の女が立ち上がり、私から離れた。左右の男たちが剣を構え直す音がした。私も立ち上がっ、帳場を背にして剣を構えた。

「お兄さん、もう一度聞いわ。ブランディギロンにつきなさいよ。そうね、一日四十ペイズでどう？」

「豚小屋になんて行くことないわ。うちに来れば五十ペイズ出すわ。ラスヴィップにつきなさいよ」

「うちも五十ペイズ出すわ。犬小屋に繋がれるなんて、真っ平でしょ！」

どうやら一日五十ペイズというのが、この町での相場らしい。確かに実入りはいいかも知れないが、命を懸ける意味がある仕事が待っ、いるとは思えなかった。

「さあ、兄さん、はつきりしてちょうだい」

コルデという金髪の女は青い靴で床を鳴らした。

「うちに来るんでしょう、旅の御方」

イヴォーンという黒髪の女は赤い爪で私を差し招いた。

人間たちの下らない騒ぎには関係なく、蠅たちは死骸の上で忙しそうだった。彼らの仕事を一気に増やすことになるのかも知れない。青でも赤でも金髪でも黒髪でも、もちろん旅の者でも、彼らには何の関係もない。

「来ないのならあの世に行きな！」

「うちじゃなけりや、地獄行きね！」

二人の女が同時に叫んだ。二人で芝居の稽古でも積んでいるのかも知れない。左右で鋼の刃が振り上げられたその時、鐘の音が聞こえた。陰鬱な低い響きのある鐘が鳴り渡った。皺でも入っているのか、びりびりと震える濁った音が入り混じり、頭の芯に鉄の杭でも打ち込むかのような、暗い力強さに満ちた鐘の音だった。

途端に酒場の中に奇妙な気配が広がった。破落戸どもは顔を見合せて、剣を下ろした。不満と不安が野卑な顔には浮かんで見えたと。二人の女はもう少しうまく表情を隠していたが、心地よくない何かが彼女たちの心中にも沸き起こっているのは確かかなようだった。

「命拾いしたようね、兄さん。でも、これでお仕舞いじゃないよ」

「私たちが戻ってくるまでに、どっちにつくか決めておくのよ、いいこと？」

二人の女は仲良く台詞を分け合うと、それぞれ青と赤の男たちに視線を送った。やくざ者たちは私が斬った二人の死骸を引きずり、陰気な顔つきで酒場から出て行った。鐘の音はまだ鳴り響いていた。

「どこに行くんだ、奴らは？」

「ダムンファンの神殿さ。町の南の外れにある。お前さんが斬った二人を神様にお供えするのさ」

主は帳場から出てきて、床の血溜まりの掃除を始めた。酒場の真ん中あたりの床には幾つも黒ずんだ染みがあった。

「そんな神の名前は聞いたことがないな」

「ダムンファンってのは祭司の名前さ。神様の名前は知らんよ」

「奴らはその名無しの神の信者なのかい」

主は柄雑巾を動かす手を止め、こちらを見て乾いた笑い声をあげた。

「奴らが崇めるのは金だけさ。お目当ては神殿にあるっていう宝石でできた神像だよ。祭司に取り入って、そいつを手に入れようとしているのさ」

私は杯に残っていた水を飲み干すと、立ち上がった。

「今の内に町からでた方が身のためだ。食い物なら少し分けてやる」

「晩飯の用意を頼むよ。僕も名無しの神の御利益に与ってみよう」

主はあきれ顔で手を振り、床の掃除に戻った。私が軋む扉を押し明けると、背中が声がした。

「くたばるんなら店の外にしてくれ。掃除が大変なんだ」

「ああ、そうするよ」

私は町の南の方に急ぎ足で向かった。

2

町の南側も開いている店はほとんどなかった。歩いている人影もなかった。窓の中から何度か視線を感じたから、無人というわけではないらしい。得体の知れない神像を巡る二派の争いに住人は息を潜めているのだろう。

鐘が鳴り止み、みずばらしい家並も途絶えた。所々生えた灌木とごつごつとした黄色い岩の中に道は続いていた。やがて道は少し登りとなり、低い丘の上に白っぽい建物が見えてきた。

乾いて白くなった木は白骨のように見えた。間口が狭く背の高い建物

で、三階分くらいの高さの鐘楼が天辺についていた。陰気な音を鳴らして破落戸どもを集めたのは、その鐘らしい。破風飾りや玄關周りには様々な聖人や僧侶やらの姿を彫った彫像が形を留めている。奥の方は横幅が広くなっている。細長い会堂に幅広の聖堂を組み合わせた作りからすると、元はジャクレン教の寺院だったのかも知れない。だが鐘楼の上には十字と日輪を組み合わせたジクロイス教の徴が傾いて立っていた。

扉は半ば開いており、中から陰鬱な詠唱が聞こえてきた。古びたウォモレン（共通語）と聞き覚えのない佶屈怪異な言葉が入り混じっていた。

「……コレピオートウル、ガサマ、マカピチューナ、シュチャナルクーント、エスマ、オセ……見よ、古の光輝ここに再びの鼓動を始めんとす……聞け、肉の引き裂かれし音と流れ出ずる血潮の音を……バスカヌ、ゴルザニユ、ブランカヌ、コレピオートウル、コルンバーニユ、エスカ！」

扉の陰から覗くと、薄暗い中に幾つもの燭火がゆらゆらと揺れていた。奥行きの深い部屋で、真ん中の通路を挟んで左右に長椅子が並んでいる。〈黒檀と黄金〉と同様に左側の席には赤い布を巻いた男たちが座り、右側の席には青い胴衣の男たちが座っていた。左側の前の方の席には黒髪の子イヴォーンが、右側の席の前の方には金髪の子コルデの姿があった。

二人の女の隣には、それぞれ男が座っていた。イヴォーンの隣には痩せた色黒の男、コルデの隣には太った色白の男、こいつらがそれぞれの頭目なのだろう。

やくざ者たちは皆一様に頭を垂れ、奇怪な詠唱の後を追ってぼそぼそと唱和していた。ウォモレンの部分も理解して唱和しているのかは疑問だった。

会堂の奥は一段高くなっており、赤みがかった艶のある木でできた小振りの説教台の向こうに一人の男がいた。黒の艶のない長衣をまとい、骸骨のように痩せていた。土気色の顔は死人のようだと言っても良かった。だが落ち窪んだ眼窩の中の黒い瞳には、ぎらぎらとした異様な力強さに満ちた光があった。黒の長衣の胸元には、ほつれた十字と日輪の縫い取りが

ある。元はジクロイス教の伝道者であったのだろうか。

説教台の前には背の低い木の台が置かれ、その上には私が斬った二人の男の死体が横たえられていた。乾きかけた血が黒く沈んで見えた。ダムンファンとかいう祭司は二つの死骸に銀の器から水を降りかけ、陰気な声で祝福の言葉を口にした。

「エヴァ、コレピオートウル、スマ、ティチュルクアン……聖なる白銀の鉄と黄金の針が汝等を罪惡の園より救い出す……エヴァ、コレピオートウル、タマ、ティチュルクアン……清浄の園に汝等の靈魂は安らぎぬ……」

一同は頭を垂れたまま、その言葉を唱和した。天井の高い会堂の中に、彼らの言葉は奇妙に長く響き続けた。祭司は古びた金色の鐘を持ち、打ち鳴らした。その音もまた会堂の中にわんわんと響き渡った。詠唱と鐘の音が絡み合つて渦を巻いているかのように聞こえた。

並んだやくざ者たちの頭がゆっくりと円を描くように動いていた。ばらばらなその動きが次第に揃い出し、詠唱と鐘の音に合わせて回り出した。頭の奥がぼうつとして、視界が揺れて霞んでいくような気がした。自分の頭もぐらぐらと揺れて回っているような気がした。

祭司が祭壇の後ろにある大きな観音開きの扉に手をかけた。高さが人の背丈の倍ほどもある拱門型の扉だった。暗赤色の扉には何かが彫り付けられているようだったが、はつきりと見えない。祭司が扉をゆっくりと開くと、会堂の反対側にいる私の足下まで冷気が吹き寄せた。扉の向こうは真っ暗だった。ジャクレン寺院の聖堂とは違う作りのようだった。

二人の死体を載せた台には車輪が付いていて、祭司はがらがらと音を立てて台を扉の中へ押していった。台に載せた燭台からの光が暗闇をわずかに照らし出した。扉の向こうは通路が続いているようだった。祭司の姿が遠ざかっていく。その行く手の暗黒の中に一瞬だけ虹色に輝く何かが見えた。

背後から見えても、その時やくざ者たちの視線がそこへ集まるのがわかった。どうやら完全に儀式の虜となっているわけではないらしい。ど

んな仕組みになっているのか、扉がひとりでに閉まり、祭司の声がどこから聞こえてきた。

「二人の靈魂は神の御技にて清浄の園へと旅立った……エヴァ、コレピオートウル、タマ、ティチュルクアン……星辰往古の座に返り月満ちる時、眩き宝玉と白銀黄金の神、現世に帰還し、すべての靈魂は清浄の園へと旅立つ……エヴァ、コレピオートウル、トマ、ティチュルクアン……」

それが礼拝の終わりの言葉のようだった。一同は夢から覚めたかのように、頭を振ったり首を回したりし始めた。

私は扉の側を離れ、建物の裏手の方へ回った。会堂の奥は建物が横に張り出し、幾つかの部屋があるようだった。祭司の居室などがあるのだろうか。庭と呼べるようなものではないが、石組の痕跡があり、ばらばらになった板や柱のようなものが転がっていた。かつてはより大きな神殿が建っていたのかも知れない。

神殿の裏は大きな窪地になっていた。差し渡し三百イート（約九十メートル）ほどの不規則な円形で、深さは百イート近くあるだろうか。黄色い岩と砂の合間から、所々灰色の階段状の石が覗いていた。石組は建物に向かって作られているようであり、古の巨大な墳墓か神殿の跡のようにも見えた。

日が傾いてきた。遮るものもない大空は色を深め、夕陽が灰色の石段とダムンファンの神殿を赤く染め上げていった。

3

主は夕食を用意しておいてくれた。私は血の臭いの残る酒場で、豆と肉の煮込みを食べた。豆は煮崩れていたが、肉は筋張って固かった。葡萄酒は酸っぱく渋味が強かった。

「赤金街道が北にずれちまったのがけちの付き始めだね。コンバリの山が

駄目になっちまって、もっぱら銅はシザラーバの山頼みになった。ピレリモ太守は街道を北に付け替えちまった。おかげでエルソパルドはどんな廃れるばかりさ。昔はこの店だって、山師や隊商で賑わってたんだがなあ」

ルッカという主は小さな目をさらに細めて、自分も酸っぱい葡萄酒を飲んだ。

「あの祭司は昔からいるのかい」

「ダムンファンか。あいつが来たのは五年か六年前のことだな。もう、その頃には町は随分と寂れていた。噂では東部から流れてきたという話だ。ジャクレン教徒が昔建てた荒れ寺に住み着いて、ジクロイスの十字を立てたりして、少しずつ何かやり始めたのよ」

主は眉間にしわを寄せ、祭司に対する嫌悪感を露にした。

「ジクロイスの布教を始めたってことかい」

「ふふん、そうかも知れないし、そうでないのかも知れないな。奴の語る教義はな、聖人ジクロイス様が聞いたら卒倒するようなものだったのよ」

ルッカは私の前に置いてあった酒瓶を手に取り、自分の杯にたっぷり注いだ。それから、私が客だったことを思い出したようで、私の杯にも安葡萄酒を注いだ。

「この世には罪人が溢れている、いや、この世の人間はすべて罪人だ。だから、天の御世に行くには裁きを受けなくちゃならん」

「ジクロイス教徒は皆そう言うだろう」

「ああ、そこまでは同じさ。この町にだって旅の伝道師が来て説教を垂れたことは幾度かある。まあ、一日二日で追い出されたがね」

ルッカは黄色い歯を見せて、少しだけ笑った。

「ダムンファンの言うことはもつと激しかった。すべての人間は罪人で、その罪業は神の贄として命を捧げるより他に贖うことはできねえんだぞうだ。どういう教えなんだか、よくわからねえが、神の為に命を捧げてこそ、ジクロイスが約束する清浄の園に居場所ができるっていう話だ。聖人

ジクロイスと奴の言う神様がどういふ関係なんだかは、ちつともわからねえ」

無論私にもわからない教義だった。ジクロイス教徒は極めて禁欲的ではあるが、彼らの神は人間を供物とすることを禁じていたはずだった。

「生贄を捧げろって言うわけじゃない。だが、ダムンファンが弔いをした後は死体は帰ってこない。奴の言う神様に捧げられて、清浄の園に昇っていくんだそうだ」

「ふむ、で、布教は成功したのかい」

ルツカは眉間にしわを寄せ口髭の下の唇を歪めた。彼はダムンファンの教義にはうなずけないのだろう。

「葬式を上げる場所が他にないからな、教えはともかく、人死に出ると奴の所に行くことになる。帰ってくると、何だかぼうつとした顔つきになってよ、足繁く通うようになる。それによ、奴が来てから何故だか葬式が多いのさ」

低い鼻を鳴らすようにして、主は皮肉な笑いを漏らした。

「あのやくざ者たちは？」

「町を出ていった奴らも多いのさ。そいつらがダムンファンの神殿で見たものを喋って、噂が広まったらしい。宝石と金銀でできたでっかい神像があるってな」

私が扉の奥の闇の中に垣間見たものが、その神像とやらなのだろうか。

「なぜ奴らは力尽くで奪わない？僧兵がいるわけでもないだろう」

ルツカは不味い葡萄酒をさらに不味そうな表情で飲み干した。

「お宝目当ての無法者は今の奴らが始めてじゃない。夜中にこっそり忍び込んだ奴らもいたし、真つ昼間に大勢で襲撃した奴らもいた。だが、誰も帰ってこなかった。誰も帰ってこないから、奴らがどうなったのかはわからない。ダムンファンは恐ろしい法力の使い手で、神殿を襲った者は皆その虜となって、自分の命を神様に捧げちまうんだっていう噂はあるがな」

確かにあの詠唱には傀儡の呪文のように人を虜にし骨抜きにしてしま

う何かがあるような気はした。

「それで、あの赤い奴らと青い奴らは祭司に取り入って何とかしようとしているのか」

「ああ、まったくもってお笑い草だね。人殺しの屑どもが、わけのわからん神様に頭を垂れて懺悔しているわけだからな。次の満月の夜には何でも特別な祭儀が執り行われて、金銀と宝石づくりの神像が御開帳になるんだそうさ。奴らはそれを狙って、ひたすら頭を下げて互いの死体を捧げるのさ。まったくもってお笑い草だ」

次の満月というのは前の町で手に入れた暦が正しければ三日後のはずだった。三日の後にはこの寂れた町で血と欲望の祭が繰り広げられることになるのだろうか。

「旦那は満月までこの町にいるつもりかい」

ルツカは酔って赤くなつた小さな目を私に向けた。

「ああ、滅多に見られない祭らしいからね」

「じゃあ、あの二人の娘を助けてやってくれ」

「二人つてのは、金髪と黒髪のことかい」

「そうさね。コルデとイヴォーンはこの〈黒檀と黄金〉の最後の踊り子さ。代々黒髪と金髪の娘の二人がこの店の看板娘だったのさ。稼ぎがねえんでやくざ者の情婦になつちまったが、心持ちはそんなに悪いわけじゃない。旦那、二人を助けて、どつかもっとまじな町まで連れ出してやってくれよ」

ルツカはそう言つて、私の杯に葡萄酒を注いだ。溢れた赤い酒が染みだらけの帳場の上に新しい染みを作った。どれが酒の染みでどれが血の染みなのだろうか。

二人の女が本当は気立てのいい娘なのかどうか、私にはよくわからなかった。つい「ああ」と答えてしまったのは、安酒で悪酔いしたのか、陰気な祭司の呪文で頭が曇っていたのか。主は「これは取って置きだ」という葡萄酒をもう一本開けたが、私には違いはよくわからなかった。

軋む階段を千鳥足で上り、埃臭い軋む寝台に転がり込んで、私は眠りについた。

4

誰かが怒鳴っていた。私のことを怒鳴っているのか、他の誰かを怒鳴っているのか、よくわからない。わんわんと奇妙に飮する声は何を言っているかわからない。だが、ひどく腹を立てているようだった。

声は甲高くなって言い争う女の声になった。金髪の女と黒髪の女が喧嘩をしている。止めなくてはいけない。なぜかはよくわからない。間に割って入ると二人の女はわめきながら私の髪の毛を引っ張った。ひどい力で髪の毛が抜けるどころか、頭が二つに裂けてしまいそうだった。二人の女の手を引き剥がそうとすると、手ひどく引っかかれた。

頭が真つ二つに裂けたところで目が覚めた。幸いなことに頭はまだ一つだった。安酒の酔いが残っていて、黄色い太陽がひどくまぶしかった。

言い争いは私の頭の中ではなく、外の通りで起こっていた。窓から見下ろすと、乾いた黄色い路上で青い胴衣の男たちと真紅の布の男たちが睨み合っていた。二派のやくざ者たちの間には荷車が止まっていた。台の上には白木の棺が載せられている。棺の上に覆い被さるようにして、巻き毛の瘦せた男が身を投げ出していた。

「その棺はラスヴィップ一家が預かると言ってるんだ！三ペイズスで何が不満なんだ！」

赤い布を首に巻いた破落戸がわめいた。

「ブランディギロンの旦那に任せろ！極楽往生は間違いない！四ペイズスでどうだ？」

青い胴衣の与太者が言い返した。

巻き毛の男は棺の上で震えながら首を横に振り続けた。

「おらの女房はおらが自分で埋葬するだ。ジャクレンの大師様の教えは守らにやあならねえだ！」

「ジャクレンの坊さんはとつくの昔にこの町を見捨てて、出ていっちゃったんだ！この町に坊さんはお一人なのさ！ラスヴィップ様に任せるんだ！」

「その通りさ。ダムンファン様の法力で往生させてやるんだ！だが、ブランディギロン様の力添えが必要だぜ！」

死んだ女の亭主は震えてはいたが、信心に揺るぎはないらしく、ジャクレンの聖句を唱えながら棺に張り付いていた。

「何なら女房と一緒にお前さんの弔いもすませてやっていいんだぜ」

青い胴衣の男の一人が剣を抜いた。

「そいつはいい考えだな。だが、ブランディギロンの錯刀じゃあ、往生は無理なことよ！」

赤い布を首に巻いた男が剣を抜いた。私は早足で階段を下り、酒場から外へ出た。通りしなに帳場のルッカが苦い面持ちで私をちらりと見た。

「この弔いはブランディギロン様が頂く！」

「寝ぼけるな！ラスヴィップ様が仕切るに決まってる！」

階段を下りている間に剣は何振りも抜かれていた。縮れ毛の男は棺に顔を押し付けるようにして、早口で聖句を唱え続けていた。

「自分で斬った奴の始末は自分でしなくちゃな！」

青い胴衣の男が、笑いながら不幸な亭主に剣を突き刺そうとした。私は駆け寄ると、その剣を自分の剣ではね上げ、やくざの喉元に切っ先を突き付けた。

「そんなに弔いが欲しけりゃ、自分の葬式でも出してみたらどうだ」

青い胴衣の男は濁った目を大きく見開いて、自分の喉元にある私の剣を見た。それから、口から泡を飛ばしてわめいた。

「て、てめえは昨日の！そうかい、ラスヴィップの犬になるってことか！」

男がそう言った途端に、別の青い胴衣の男が剣を突き入れてきた。私は

最初の男の喉を斬り裂いてから、返す刀で二番目の男の剣を弾き飛ばした。三人目が斬り込んできたのでそいつの胸板を貫き、二人目の二手目をおかわして胴を斬り裂いた。青い胴衣が噴き出す血で黒く染まった。最初に剣を抜いた男の首からはまだ鮮血が噴き出していた。

四番手はすぐには来なかった。狂犬みたいな奴らでも、無駄死にを避けるくらいの理性はあったようだ。十イート（約三メートル）ばかりの間合いを置き、青い胴衣の連中は唸りながら私を睨みつけた。反対側では紅巾の奴らが隙は見せないものの様子見を決め込んでいた。

「ジャクレンの大師様は女房をどこに葬れと言ったんだ？」

私の問いに巻き毛の男は恐る恐る顔を上げて答えた。

「ダスカッチの谷です。あそこが三代前からのお墓なんです」

「早く行け。この陽気じゃ蠅どもが黙っちゃいない」

男は両側のやくざ者たちを交互に見て、震えていた。

「さっさと行くん。でないとこの荷車に二十人ばかりの骸を載せることになる」

男は荷車の梶棒をつかんで引き出そうとした。

「待ちやがれ！この町で勝手に引いてできると思ってるのか！」

青い胴衣のやくざ者が巻き毛の男に斬りかかろうとした。私は腰帯から手裏剣を抜き、投げつけた。半イート（約十五センチ）ばかりの刃が奴の首筋に突き刺さった。やくざ者は赤い血の泡を吹きながら倒れて、手足を痙攣させた。

荷車を引いた男は聖句を唱えながら走り出した。他には誰も動くことはしなかった。柩車は黄色い砂埃の向こうに見えなくなった。

ブランドイギロンの男たちはじりじりと間合いを詰め始めた。ラスヴィップの男たちはどう出るべきか思案中のようだが、それでもわずかずつ間合いを詰めていた。

馬の蹄の音が近づいてきた。それも左右から。

「てめえら！朝っぱらから何やってやがるんだ！」

青い胴衣の男たちの背後から駆け込んできた栗毛の馬の背には、恰幅の良い色白の男が跨っていた。青い胴衣には他の連中とは違って、幾つもの宝石が縫い込まれ、ぴかぴかと光っている。吊り上がった小さな青い目は酷薄そうで、大きな鼻が随分と上を向いていた。豚のようなという形容が出てきそうだが、豚には見えなかった。牙こそ生えていなかったが、ひどく気性の荒い猪というのが当を得ているだろう。

その後ろには昨日「黒檀と黄金」で会った金髪の女、コルデが眠そうな顔で馬の背に乗っていた。

ブランドイギロンは血まみれで横たわっている四人の子分たちを恐ろしく冷たい目で見回した。

「トージャー！何だ、この様は！」

名前を呼ばれたらしい背の高いやくざ者は、たちまち青ざめて背丈が一イートも縮んだかに見えた。

「へ、へい、この旅の者が出しゃばってきやして……」

ブランドイギロンは体つきからは想像もつかない素早さで馬から飛び降りると、トージャーという男を肉の厚い手で張り倒した。背の高い男は枯れ枝のように吹っ飛んで砂埃を立てた。

左側の赤い布の男たちの後ろからは青毛の馬に乗った男が現れた。男は痩せていて壁土のような暗い肌をしていた。ひどい痘痕も壁土が剥がれたかのように見えた。分厚い瞼の下で黒い瞳が陰気な光を放っていた。鼻が長く歪んだ唇の脇には深いしわが刻まれていた。腐肉を漁る野犬を思わせる容貌だった。首には金糸銀糸を織り込んだ紅巾を巻いていた。

すぐ後ろには黒髪の女、イヴォーンが馬上から物憂げな目でつまらなそうにあたりを見ていた。

「ほう！こいつは朝から景気がいいこったな。神様もさぞかしお喜びだろうて！」

ラスヴィップは青い胴衣の四つの死体を見て満足げに笑った。

「こいつあ、何としてもうちの客人になつてもらわにやあならねえな。お

い、ハザント、金子だ」

ハザントと呼ばれた背の低い男が革袋からペイズ銀貨を出して見せた。

「へへ、一日五十ペイズだぜ、いい稼ぎになる」

「馬鹿野郎！もう四人も殺ってるんだ。六十ペイズ出せ！」

「へへ、へい」

ハザントは下卑た笑いを浮かべながら、もう一枚十ペイズ銀貨を取り出した。ラスヴィップは馬から下りて、自分の手から銀貨を引ったくった。

「どうだ？一日六十ペイズ、豚野郎の子分を一人殺るたびに五ペイズ出そう」

赤組の首領は長い指の中で銀貨を擦り合わせて嫌な音を立てた。

「五人だ。昨日酒場で一人殺ってる。合わせて、まず八十五ペイズもらおうか」

ラスヴィップは痘痕面を歪ませて、不快そうな顔になった。

「昨日はうちの者も殺した。それで帳消しだ」

「そうかい。ならばここで紅巾の伊達男を四人ばかり殺して、青い胴衣を着ることにしようか」

私はまだ薄笑いを浮かべていたハザントという小男の首に血のついた刃を突き付けた。ハザントの顔には品のない笑いが凍りついて動かなくなった。赤い布の男たちがざざと砂埃を立てて前へ寄り、それに応えて青い胴衣の男たちも一斉に踏み出した。次に私が動けば、たちまちあたりは修羅場となるのだろうか。

ラスヴィップの澱んだ黒い目とブランディギロンのぎらりと光る青い目が互いの薄汚い胸中を覗き込むように視線をぶつけあった。二人の後ろでは黒髪と金髪の情婦が敵方の首領にまた別の視線を送っていた。イヴォーンは深い鳶色の目を細めて挑発し、コルデは珊瑚色の唇と乳房を突き出して誘いかけた。

「満月が楽しみだな、ラスヴィップ」

ブランディギロンが静かに言った。十年來の友人と酒宴の約束でもしているみたいだった。

「俺も待ち切れないぜ、ブランディギロン」

ラスヴィップもまたひどく穏やかな声で言った。どんな酒盛りになるのか、あまり考えたくはなかった。

「帰るぞ！」

青い胴衣の首領は栗毛の馬に飛び乗り、手下を見もせずに馬首を返した。

「ハザント、今すぐ八十五ペイズを払え。客人、ついてこい」

紅巾の首領も青毛の馬に跨がり、背を向けて進み出した。

二人の女は去っていく二人の男の背中に、ねっとりとした視線を送り続けた。

5

赤組の根城は「黒檀と黄金」から北へ行った所にあった。元は宿屋だったと思しき二階建ての大きな建物で、露台に掛かった大きな看板は真っ赤に塗りつぶされ、狼か犬らしき獣の絵が乱雑に黒く描かれていた。

一階のかつては食堂か酒場だった大きな広間には、目つきの悪い破落戸どもが十人ばかりで留守を守っていた。彼らは一斉に私に敵意ある視線を送った。

「客人のスナブ・ランケンだ！青豚野郎を四人も屠った。丁重にお迎えしろ！」

ラスヴィップが低い声で言うと、視線は私を値踏みするものに変わった。

「酒を用意しろ！ケルボのメクサーラを開けるんだ！」

瘦せた野犬のような男は部屋の奥の一段高くなった場所——かつては陽気な楽団や踊り子が活躍した舞台だったのだらう——に据えられた背の高い椅子に座った。隣にはイヴォーンが侍り、私は一段下の席を与えられた。酒と仙人掌の漬物、それに砂蜥蜴の干肉が用意された。

「乾杯だ。青い豚野郎の死と、金と銀、宝石の光に！」

ケルボのメクサーラはそれなりの味わいだった。少なくとも舌を刺すような味ではない。黒髪の女はラスヴィップと胴の杯を合わせたが、暗い鳶色の目は私の方を見ていた。誘いかけるような、挑むような、魅惑的な目つきだったが、とりあえず無視しておくことにした。

「客人、どこから来た？こころじゃ聞かねえ名前だな」

「サンジェリイからだ」

ラスヴィップは重たげな臉を少しだけ開いて、驚きの表情らしきものを作った。

「ほう、西岸の宝玉都市からこの砂埃の町へ？」

私はこの男と話をしたくなかったので、話題を変えることにした。

「ああ、砂埃の町にも思わぬお宝が眠っているらしいからな」

たちまちやくざの目つきは懷疑心に満ちたものとなった。

「何をどこまで知っている？」

「青い胴衣の奴らを斬るほど、お宝に近づくとことさ」

赤い布を巻いた男は、人を信じるということなどなさそうな黒い冷たい目で私を見たが、それ以上の質問はなかった。

「それだけわかっていれば問題はない。斬れば斬るほどお宝が近くなる。だが、妙な気は起こさねえことだ。俺たちもあの腐れ坊主の説教を好きで聞きに行ってるわけじゃねえ。余計なことはするなよ」

「ああ、そうしよう」

ラスヴィップは言うべきことを言い終えて私に興味をなくしたようだった。無口になり、イヴォーンに酌をさせてメクサーラを飲み続けた。この男はいくら飲んでも酔うということがないようだった。

昼頃になって、鐘の音が聞こえた。陰鬱な歪んだ音色はダムンファンの神殿のものに違いなかった。広間にいたやくざ者たちに奇妙な気配が漂った。博打に興じたり、卑猥な冗談を言いあっていた男たちが、急に我に返ったように——否、我を忘れたように——いすべきか——背筋を伸ばして、陰気な鐘の音に聴き入った。

神殿の佝僂怪異な唱句の真似事を誰かが小声で口にしていた。私はやくざたちの凶暴な顔を見渡したが、誰が唱えているのか一向にわからなかった。メクサーラの酔いが作りだした幻聴なのだろうか。

奥に引っ込んでいたラスヴィップが姿を現した。共に奥に行ったイヴォーンの姿はなかった。

「鐘だ、鐘が鳴っている。豚野郎の弔いだ。神殿に行くぞ！」

紅巾の首領はどこか夢でも見ているかのような口調でそう言い、根城を出立した。私も子分たちと一緒にその後を追った。

神殿の会堂ではすでに青い胴衣の男たちが右側の席に着いていた。赤い布の男たちは無言で左側の席に座った。私は一番後ろの列の中央より席を取った。祭壇には四つの骸が並べられ、その向こう側に青黒い顔をした瘦せた祭司がいた。

それは奇怪でありながら滑稽ともいえる光景だった。殺し合いを演じている非道のやくざ者たちが、敬虔なジャクレンの信者かジクロイス教徒のように、静かに会堂に座り頭を垂れ、祭司の後をついて得体の知れぬ神へ祈りを捧げているのだ。

昨日と同様の光景が繰り広げられた。古いウオモレンと馴染みのない言葉が歪んだ鐘の音と響き合い、異様な気配を会堂の中に作り出した。やくざ者たちの頭がゆっくりと回り始めた。

「……聖なる白銀の鉢と黄金の針が汝等を罪惡の園より救い出す……エヴァ、コレピオートウル、タマ、ティチュルクアン……清浄の園に汝等の靈魂は安らぎぬ……」

祭司が黄金の鐘を打ち鳴らし、暗い紅色の扉を開いた。四つの遺骸を暗

い通廊の中へ運び込んでいく。その時、祭司ダムンファンの目が、二つの暗黒の窟のような目が、私を見た。

「神への供物を用意した猛しき男に祝福を！ オンバ、カル、コレピオートゥル、キメラナー！」

一同の者が振り返り、私を見た。その幾十もの目が、皆祭司の異様に黒々とした目に見えた。凍りついた巖のような視線が肋を突き破って心の臓に突き刺さるような気がした。席を立てて外へ出たかったが、体は動かなかった。喉の奥に苦い塊が込み上げてきて、今にも吐きそうな気がした。

幸いなことに復唱がすむとやくざ者たちは説教師の方へ向き直ってくれた。黒衣の祭司の視線も外れ、また佞屈な唱句を並べ続けた。どっと冷や汗が噴き出し、膝が震えた。どうにか立ち上がると、会堂の外へ出て、乾いた熱い空気を吸い込んだ。

私は一足先に赤組の根城へ戻り、まだ残っていたメクサーラをあおつた。火酒を二杯飲むとだいたい気分も落ち着いてきた。しばらくすると敬虔なる信徒たちが帰ってきた。ラスヴィップが私をじろりと見て声をかけてきた。

「客人、先に帰ってたのか」

「ああ、すまんね。曾爺さんの代からヴィンズク教徒なんですね。他の神様や聖人様を崇めるのはきつい御法度なのさ」

私は額の真ん中を中指で触れ、ヴィンズク教徒の祈りの仕草をしたみた。

「そっかい。どこの神様を信じようとお前さんの自由だからな。だが、ダムンファンの神殿で無礼なことをしちゃならねえ。お宝が遠のいちまうからな」

ラスヴィップは口の脇のしわを深くして皮肉な笑いのような表情を作った。神殿を出ると魅入られていた記憶は消えてしまうのだろうか。宝物を手に入れるために祭司に調子を合わせて取り入っているとしか、彼

らは思っていないのだろうか。

「ああ、わかった」

「うまくやれてることだ。お前さんの仕事はダムンファンの神様に捧げる豚野郎の死体をたくさん作ることだ」

ラスヴィップはイヴォーンと共に奥の部屋へ消えた。黒髪的情婦はちらりとこちらを見やって、何かを訴えかけるような目をした。神殿でのおどましい視線ほどではなかったが、少しは胸の中に入ってくるような視線だった。

6

夜になった。私は広間に近い一部屋を与えられた。ブランディギロン一党の襲撃があった時には盾にしようという魂胆もあるのだろう。広間で酒を飲み骰子博打に興じている男たちの声が聞こえたが、夜半前には静かになった。

小さな窓から九割方満ちた月の冴えた光が差し込んできた。私は軋む寝床に座って、昼間のとは違う安物のメクサーラを少しずつ飲んだ。一気に飲んで喉が焼けてしまうような酒だった。仙人掌の漬物もくすねておけば良かったかもしれない。

かすかに軋む音がした。寝床ではなく、扉の向こう側からの音だ。本当にかすかに扉を叩く音がした。私は剣を抜き、扉に寄って誰何した。

「誰だ」

扉の透き間から囁き声が答えた。

「イヴォーンよ、開けて」

燭台を差し上げると扉の透き間から鳶色の目が光るのが見えた。私は頼りない掛け金を押し上げた。首領の情婦は蛇のように身をくねらせて滑り込んできた。私が突きつけた刃にも平然としていた。

「用心深いのね」

もうこの部屋の主になったような口ぶりだった。

「怪しげな神様のところでお申いはご免被る」

寝衣ではなく昨日と同じ黒の透かし刺繍入りの服を着ていた。真紅の腰帯には安っぽい宝石で飾られた短剣が手挟んであった。

イヴォーンは私の剣を掌で押しやると、細い腕をすつと私の首に回した。アニヤチ皇帝の間者でもそんな早業はできないだろう。

「待っててくれたのね」

熱い息と素早いくちづけで、囁き声の台詞は百倍くらいに膨らんだ。イヴォーンは私の首に回した腕からは力を抜かず、そのまま体を私に預けた。不意の重さに私は彼女と共に寝床に倒れ込んだ。手放した剣が床に落ち、がらんという音を立てた。

彼女の両腕はまだ私の首に回ったままだった。ねっとりとしたくちづけが繰り返されたが、細い指は私の首や頭をなで回し続けた。腰の短剣を使う気はどうやらないらしい。

「待っていたのよ、あなたのような男が現れるのを……」

くちづけとくちづけの合間に彼女はそう囁いた。私の襯衣を脱がすと、馬乗りになったまま真紅の腰帯を解いて一緒に黒い服を脱ぎ捨てた。蠟燭の灯火が小振りだが突き出した乳房に美しい陰影を描いた。

何が狙いだと無粋なことを聞くのは後回しにすることにした。私は黒髪の女の細腰を両手でつかんだ。互いの熱いところを重ね合わせると、イヴォーンは眉根を寄せ唇をまくり上げて激しく喘いだ。少女めいた美貌は獣のような面持ちとなり、滑らかな浅黒い肌には玉の汗が浮かび芳しい女の匂いが立ち昇った。

行為を終えると黒髪の女は私の胸をなで回しながら言った。

「スナブ・ランケン、私と逃げて！この町にいたら私もあなたも死ぬばかりよ。私を連れて逃げて！」

私は体の上に半身を預けている女の背中を撫でた。太い蚯蚓腫れのよ

うな筋が何本も指先にあたった。

「この傷は？」

「鞭の痕よ！あいつは女を鞭打つのが好きなの！理由なんてなんでもいい、鞭を振るわなければ、一物を役立てることもできない屑野郎よ！今日は私があなたに色目を使っただけで言っただけで十回も打ったのよ！」

女は私の胸の上の指に力を込め、爪が食い込んだ。

「君を連れて逃げたらラスウィップはひどく怒るだろうな」

「気の触れた犬のように怒り狂うわね！恐いの？あなたも意気地なしの仲間なの？」

イヴォーンはさらに爪に力を込めたので、私は彼女の手をつかんで引きはがした。

「おもしろいことが起こるかと思って聞いてみたのさ。僕は君の爪の方が恐いね」

「嫌な男！さあ、直ぐに登ちましよう！ラスウィップはぐっすり眠っているわ」

黒髪の女はそそくさと床を出て、脱ぎ捨てた服を身に着け始めた。

「見張りはどうする？」

イヴォーンは黒い透かし刺繍の服に袖を通しながら、少しいらだった調子で答えた。

「どうせ、酔っぱらって寝てるに決まってるわ。起きてたら、二度と目が覚めないようすればいいのよ！」

だが、見張りはどうやら寝てはいなかったようだった。ひび割れたような叫び声が聞こえてきたからだ。

「殴り込みだ！豚野郎どもが襲ってきたぞ！ブラン……」

敵の名前を最後まで叫ぶことはできず、代わりに短い悲鳴が聞こえてきた。それから、大勢の足音、剣戟の音、わめき声がいっぺんに沸き起こった。

私は寝床から飛び起き、服を着た。襯衣の釦を留め終わった刹那、部屋

の扉が打ち破られ、血刀を引っさげた青い胴衣の男が現れた。

「死ねい！」

男は引きつった声を上げて斬りかかってきたが、真紅の腰帯を締めているイヴォーンの姿に一瞬目を止めたのは間違いだった。私はその隙に剣を取り、男の青い胴衣の真ん中を深々と突き刺した。引き抜くと抑えた傷口から鮮血を振りまいて男は倒れた。

部屋を出ると次の青組の男と鉢合わせとなった。奇声を上げて男は剣を突き上げてきたが、私の突きの方が速かった。奇声の続きはどす黒い血となって廊下に飛び散った。

「離れるな！」

私は玄関広間に向かって狭い廊下を走った。赤い布を巻いた男と青い胴衣の男が差し違えて倒れていた。イヴォーンがどちらかを踏んづけて「ひいっ！」という声を上げた。そいつはまだ死に切れていなかったらしく、苦悶の呻き声をあげた。

広間は血の海だった。酔って寝ていたのだろう、何人もの赤組の男たちが血みどろの死体となっていた。薄汚れた床の上にぬめぬめと光る臓物がぶちまけられ、手足が何本か転がっていた。

広間の真ん中では大きな卓子を盾にして、赤組と青組が対峙していた。急襲に押されたものの、何とかラスヴィップ一家は持ち堪えて、広間から奥への突入を阻止しているらしい。何人かがその守りを破って突入して斬られているのだろう。

「客人、遅いぞ！」

ラスヴィップは返り血を浴びて痘痕面に真紅の斑模様が加わり、凄い形相となっていた。血走った目で私の後ろのイヴォーンを一瞥したので女は震え上がった。

「すまんね、いろいろ忙しくてね」

ラスヴィップは今にも斬りかかってきそうな目つきになったが、青組から飛んできた弩の矢が怒りの矛先を変えてくれた。間近から発射された

矢に怒り心頭に達したやくざの首領は、大卓を飛び越えると敵陣に斬り込んだ。

これを合図に激しい斬り合いが始まった。ラスヴィップは狂犬のように凶暴だったが、太刀筋はしっかりしていた。怒りを内に込めて刃を振るえる男だった。実戦向きの飾り気のない短めの刀は、たちまちの内に青組の男たちの血に染まった。紅巾の男たちは首領の殺戮に奮い立ち、剣を振り回した。

ブランドイギロン一党も決して怯みはしなかった。東部の山賊流なのか、鉈のようにがっしりした山刀で赤組の剣を弾き返し、紅巾の巻かれた首筋に分厚い刃を叩き込んだ。雄叫びと絶叫、肉と骨を断つ音、鮮血の噴き出る音が広間に響き渡った。

私は斬りかかってくるやくざ者をあしらいながら、じりじりと出口に近づいた。イヴォーンは短い悲鳴をときどきあげながら、何とか私についてきていた。黒い衣装も白い肌も血飛沫に染まっている。広間はひどい乱戦で誰も私たちに注目している暇はなかった。

玄関扉はもう目の前だった。私は立ち塞がる青組の男の喉笛を横一線に切り開いた。溢れ出す血で青い胴衣を黒く染めながら、男は倒れ伏した。

「行くぞ！」

私はイヴォーンの手を取り、外へ駆け出そうとした。扉は開いており黒い夜空が見えていた。

ぶんという音がして、血みどろの抜き身が目の前に振り下ろされた。

「客人、どこへ行くつもりだ！」

ラスヴィップが物凄い形相で私を睨みつけていた。イヴォーンが鋭い悲鳴を上げて私の腕にしがみついた。

「外の空気を吸いに行くのさ。ここは血腥さすぎるからね」

「ふざけるな！」

赤組の首領は暗い目をして一撃を放った。私は既に血刀をかわし、反撃

の刃を打ち込んだ。痘痕面の男は私の剣を受け流し、正確に私の心臓めがけて突きを入れてくる。身を反らして切っ先をかわすが、すぐさま次の一手が襲いかかってくる。

ラスヴィップは油断ならない使い手だった。暗い憤怒の炎を目に点しているも、剣は乱れることがなかった。余分な言葉は発さず、黙々と剣を振るった。鋼の刃が幾度も火花を散らし、夜の闇に飛び散った。

赤組の根城から青い胴衣の男たちが駆け出してくる。後を赤い手巾の男たちが追うのが見えた。首領の奮戦の甲斐あってか、ブランディギロン一党の襲撃は失敗に終わったようだった。だが、一瞬でも戦いの趨勢に気を取られたのは失敗だった。ラスヴィップの剣が私の左肩のあたりをかすめ、鋭い痛みが走った。畳みかけるように次の一撃が迫る。

夜気を裂く鈍い音がして、紅巾の男は左肩を抑えてうめいた。剣を取り落とし、右手で押さえた左肩には、短い弩の矢が突き刺さっていた。振り向くと、二十イート（約六メートル）ばかり向こうで馬上の太った男が弩を持って、薄笑いを浮かべていた。使い手はブランディギロンだった。

青組の首領は次の矢を放とうとしたが、頭が射られたのを見て、激昂した赤組の男が放った投げ槍に邪魔された。ラスヴィップ一党は傷ついた首領を守って、敗走する敵を投げ槍や弓矢で追撃した。

私は短い悲鳴を上げ続けているイヴォーンを引っ張り、何とか槍や矢を避けながら、逃げた。暗い街路を少し走ると、ブランディギロン一党の馬がつながれていた。イヴォーンを馬上に投げ上げるようにして、自分も跨ると青組の男たちと一緒に駆け出した。

急襲を撃退したことで良しとしたのか、あるいは首領が思いの他深手なのか、ラスヴィップ一党はさして追っては来なかった。怪しげな神に捧げる死体集めに忙しいのかもしれない。

ブランディギロンが馬を寄せてきた。反対側にも前後にも青い胴衣の男たちが馬を近づけ、走りながら私たちを取り囲んだ。

「赤犬野郎と斬りあったことで、うちの子分どもを斬ったことは帳消しに

してやる！そのかわり、うちの客になつてもらおうか。金は同じだけ払う。いいな！」

四方を囲むやくざ者たちは抜き身をこちらに向けて私の答えを待っていた。女連れでこの囲みから抜け出すのは難しそうだった。

「いいだろう。赤だろうが青だろうが大した違いはないからな」

私の腰に回されたイヴォーンの腕に力が入るのがわかったが、振り向かないことにした。

7

青組の根城は町の西側にある、やはり宿屋だったと思しき建物だった。ラスヴィップ一派のものより幾らか大きい。迫持型の看板がかかっていたらしい門をくぐると四角い中庭となっており、二階建ての露台のある建物を取り囲んでいた。かつては到着する馬車、出発する馬車、旅人や商人、馬丁や御者で賑わっていたのだろう。今は部屋から持ち出されたのか、卓子と椅子が幾つも乱雑に置かれていた。庭の真ん中では篝火が焚かれ、明け始めた空に灰色の煙を昇らせていた。

「聞け、野郎ども！今日は赤犬野郎に一泡吹かせてやった！しかも奴の女と頼もしい客人を奪い取った！今頃、赤犬めは齒軋りしすぎて牙が抜ける頃だろうぜ！聞け！今夜は俺たちの勝利だ！」

ブランディギロンは卓子の上に乗し、青い小さな目をぎらつかせて、拳を振り上げた。右側にいるコルデは陰のある目で、左側の黒髪の子を見つめた。イヴォーンはその視線を無視して笑っていたが、蒼色の目には金髪の子と同様の陰があった。

子分たちはまだ殺し合いの興奮が冷めぬ荒々しい声で叫び、それに応えた。

「満月は明日だ！ラスヴィップの犬野郎どもは夕刻にはダムンファンの神

殿に今日の骸を捧げに行くだろう。奴らには死骸があるが、いいか、聞け！俺たちには別の供物がある！明日にはゲスリン工房からの貢ぎ物が届くはずだ！たっぷりの死骸を神様に捧げるんだ！ご利益を頂けば氣狂い坊主に用はねえ！八つ裂きにしてやれ！」

「おうっ！」という闊の聲があがった。私には彼らが何かに憑かれているとは思えなかった。ブランドイギロンにしてもラスヴィップにしても、そうだ。彼らは怪しい神への供物を捧げることで陰気な祭司に取り入り、お宝を手に入れる機会をうかがっているつもりらしいが、あの儀式の最中に彼らはどの程度正気を保っているのだろうか。

今晚の斬り合いで死んだのは、どちらも十人は下らないだろう。怪我人も多い。次の襲撃ではいったい何人が生き残れるのだろうか。それともゲスリン工房からの貢ぎ物とやらで、圧倒的優位に立てるといふ目論見があるのだろうか。

ブランドイギロンは二人の女を両脇に抱えていった。中庭から奥の部屋へ消えるときに、少しずつ間を置いて二人が振り返った。コルデは情に訴えかけるような目をして、イヴォーンは恨みがましい目をして、私を見た。私が軽く手を振ると、二人ともひどく怒ったような目になった。

私はまた入り口近くの部屋をあてがわれた。えぐみの強い安っぽい葡萄酒と玉蜀黍の粉で作った黄色い薄い麺麭、それに辛い鳥肉が配られた。大酒は飲まずに休息を取れということらしかった。

やくざ者たちの振る舞いは赤組でも青組でも変わらず、中庭で野卑な冗談を肴に酒をおおっていたが、さすがに夜襲の後の疲れが出たか、日が昇りきる頃には部屋の中に引き上げたり、日陰で眠り込んだりし始めた。

中庭が静まるとどこから奇妙な声が聞こえてきた。気をつけなければ聞き逃してしまうような低く小さな声だった。それは祈祷の文句だった。ダムンファンの神殿で黒衣の祭司が唱え、やくざ者たちが唱和していた奇怪な祈りだった。

誰が唱えているのかわからなかった。中庭を見渡したが、頭を回してい

る者の姿はなかった。それらしい呟きを発している者の姿もなかった。赤組の根城でも誰かが唱句を唱えていた。ダムンファンの怪しげな神への祈りは神殿から町の中へ、あるいはやくざ者たちの心中へと届いているのだろうか。

いやな気分だったが、ダムンファンの神よりも眠りの神の方が強かった。私は傾いた寝台の上で眠り込んだ。

目が覚めると中庭には長い影が落ちていた。波打つ屋根の向こうに日の残りがぼんやりと赤く見えた。中庭に面した回廊を歩いてくる影があった。柱の影から影に飛び移るように、中庭に数人いる男たちを気にしながら近づいてくる。歓声が聞こえてくるから、あらかたの連中は日暮れ後の寒さを避けて、食堂で飲んでいるのだろう。青黒い影の中を忍んできたのはコルデだった。

「スナブ・ランケン、話があるのよ。部屋に入れて」

コルデは短い台詞の途中にも後ろを振り向いた。

「誰も君には気づいていないようだが」

金髪の女は私の言葉は聞いていないようで、開いていた扉から私の部屋に素早く入り込んだ。

「はやく扉を閉めて！」

女は押し殺した声で言った。私はその通りにした。女は寝床に腰を下ろし、青い繻子で縛っていた金色の髪をほどいた。洋灯の明かりの中で、白い肌も珊瑚色の唇も一様に黄ばんで色褪せて見えた。

「スナブ・ランケン、私を連れてここから逃げて！」

コルデは小さな拳を豊かな股の上で震わせて、そう言った。青い瞳が潤んで赤らんで見えた。

「これを見て！」

女は絹繻子の青い腰帯をずらすと解き、襷の多い白い服を脱ぎ捨てた。後ろを向き白い下帯をずらして肉付きの良い尻をむき出しにした。手のひら大の丸い印がそこにあった。肉に刻まれた円の中の赤黒い文字

はブランディギロンの頭文字のようだった。

「あいつは自分の女だという印に烙印を押すのよ！しかも、私を抱くたびにこの焼き鑊の後をさわっては舐め回すのよ！」

コルデは私に飛びついて体をすりつけ、嗚咽を漏らした。

「豚野郎のおもちゃになるのは、もううんざりだわ！」

女は湿った唇を私の唇に押し付け、熱く濡れた舌を口の中に押し入れてきた。私は女の下帯を解き、寝床に押し倒した。金色の茂みの中に赤い肉唇が光って見えた。広げた手からはみ出す大きな乳房を強く握りつぶすと、コルデはひどく乱れて獣のような大きな声を出した。私は彼女の下帯をまくれ上がった唇の間に押し込んだ。女は喉の奥から唸るような声を出して、柔らかい白い肉を波打たせた。

行為を終えて横たわっていると、小さな窓に青白い月が見えた。

「明日は満月だな」

「そうよ、だから逃げなくちゃ」

コルデは私の胸をさわりながら言った。

「満月の夜には何があるんだ」

「知らないわ。ダムンファンの神殿に行くと、いつも頭がぼうつとしてくるのよ。祭司がわけのわからないことを言って、死体をあの……あの扉の奥に運んで……」

あの扉という言葉を彼女はあまり口にしたくないようだった。

「でも、満月の夜には何かがあることはわかるんだな」

「そうよ、はつきり祭司の言葉を聞いたっていう覚えはないのに、今度の満月の夜には大切な、そう、とっても大切な儀式があって、その時、あの、あの扉の奥の神様が出てきて……」

私の胸に置かれた女の手が震え、力が入るのがわかった。

「神様が出てくる？扉の奥にあるのは宝石できらきらの神像じゃないのか。本当の神様が降臨なさるのかい」

コルデは両の手で私の肩を強くつかみ、息を乱しながら言った。

「私は見たのよ！お祈りの最中に、ふっと目が扉の奥に吸い込まれるようになって、神様から目を離せなくなったの。みんなは頭をぐるぐる回していたわ。私だけが扉の奥を見ていたのよ。ダムンファンが呪文みたいなお祈りを唱えながら、冷たい目で私を見て、ぞっとするような笑いを浮かべてた。扉の奥の宝石みたいに光るものが動いていたわ。何だかわからないけど光る腕みたいな棒みたいなのが何本も動いて、死体をつかんでばらばらに引き裂いて……」

コルデが悲鳴を上げそうになったので、私は彼女の口を手で押さえつけた。見開かれた青い目から涙がこぼれ落ち、私の肩には爪が食い込んだ。しばらく強く抱いていると息が静かになってきた。

「スナブ・ランケン、今夜のうちに私を連れて逃げて！これまでは死体だけだったけど、きつと満月の夜に神様が出てくれば、きつと、きつと私は生贄にされるのよ！はやく、逃げて！」

コルデは私の返事を待たずに、金色の髪を振り乱して寝台から飛び降りると、慌てて服を着始めた。恐慌に駆られていてなかなか金の帯留めを留めることができなかった。

私が洋袴を履いたところで、扉の向こうに荒々しい足音がして、激しく扉が叩かれた。

「客人、ここを開けるんだ！」

ブランディギロンの声だった。

「何の用だ」

そう言いながら私は剣を構えた。

「ここに金髪のあばずれ女がいるはずだ！開けろ！」

答える前に青組の首領は扉を蹴破って部屋に入ってきた。右手には山刀を構えている。コルデの姿を認めると怒りで顔を真っ赤にした。ブランディギロンの大きな体の後ろにはぼっそりとした黒髪の女の姿があった。

「貴様ら、よくも俺の前でぬけぬけと……」

太った男は台詞を最後まで言うことはできなかった。私は剣先を肉の重なった顎に押しつけ、少しづつ力を入れた。

「剣をはなせ！あんたが見た目よりはずっと素早いことは知っているが、自分の喉が裂かれるより前に僕を斬ることはできない」

ブランディギロンは怒りに耳まで赤くしてもごもご何か言ったが、剣は手放した。

「そうだ、さすがやくざの親分だ。気持ちを静める方法を知っているらしいな」

猪のような顔が赤黒くなった。卒中にでもなってしまうかも知れない。

「いいかね、僕はその黒髪のお嬢さんをここに連れてきてあんたにくれてやった。で、この金髪のお嬢ちゃんは僕のところに来た。つまり、これは公平な取引ということだ。わかるだろう」

私は剣先にもう少し力を入れた。ブランディギロンの顎から一滴血がしたたり落ちた。

「あんたには僕の力が必要だ。子分どもをおおっていたが、昨日の出入りで死んだ人間は青組の方が多い。しかも死体はほとんど赤組が取った。最後の決戦をするにしても、祭司に取り入るにしても、あんたは不利だ。ゲスリン工房からの貢ぎ物とやらが明日必ず届くという保証があるのかい？用済みの女のことに目くじら立てている場合ではないだろう」

ブランディギロンは小さな青い目を不自然にきよときよと動かし、上を向いた鼻を大きく膨らませて、息を出し入れした。よじれた口からは泡を吹きそうだったが、どうやら気持ちを抑えることに成功したようだった。

「その女はくれてやる！好きにしろ！」

吐き出すようにそう言うと、踵を返し部屋から出ていった。腹いせにイヴォーンを殴ったのか、短い悲鳴が聞こえた。

部屋の隅で息を殺していたコルデは、力なく床に座り込んだ。

「身支度はそれでいいのか」

「えっ」

女は無意識に髪に手をやり、乱れた金髪をなでつけた。私は女の手を取り立ち上がらせた。

「〈黒檀と黄金〉に行くぞ」

「ええっ？」

コルデは訝しげに聞き返した。

「ここよりはましな宿だろう」

8

〈黒檀と黄金〉には薄暗い明かりが点っていた。止まり木に座りルッカが一人で銅杯を傾けていた。

「客を連れてきた。これで泊めてやってくれ。一番いい部屋だ」

私は銀髪の主の前にペイズス銀貨を置いた。ルッカは酒に酔った赤い目で私を見た。

「旦那はいったい何をするつもりだ」

「頼まれ事を片づけてるだけさ。ついでに悪党どもも片づけるか。陰気くさい祭司と神様も」

「正気かね、旦那」

ルッカは首を振って冷めた笑いを浮かべた。

「この娘だけでも連れてさつさと逃げてくれ。明日は満月だぞ」

コルデは元の雇い主の方を見て、少しだけ申し訳なさそうな顔をした。「そうはいかない。看板娘はちゃんと二人そろえなきゃな」

宿の主は壊れた人形のように首を振り続けた。

私は青組の根城へ戻った。敷布にはまだコルデの匂いが染みついていた。窓の外の冷たい月を見ていると、女の悲鳴が聞こえてきた。イヴォーンの声だった。焼き鰻を当てられているのかも知れない。

次の日も良く晴れていた。私は日差しを避けて露台の下で粉っぽい麵麴をまぜい葡萄酒で流し込んでいた。豆と肉の煮込みは昨日の鳥と同じ辛い味がした。このあたりの料理人はこの味付けしか知らないのだろう。

中庭の向こうから黒い服の女が歩いてきた。黒髪が乱れて、青ざめた顔をしていた。目の下には深い隈ができて、死人のような顔色だった。

イヴォーンはまっすぐに私のところへ歩いてくると、いきなり平手で私の頬を叩いた。黄色い麵麴が半分吹っ飛んで、葡萄酒が少しこぼれた。

「この裏切り者！おまえのせいだ、おまえのせいだ！」

女は黒い透かし刺繍の裾をまくり上げようとしたが、途中で手を止め、もう一度私に殴りかかろうとした。私は彼女の細い手首をつかんだ。

「誰が誰を裏切っているんだか、僕にはよくわからないが、とりあえず今は騒がない方がいいかもしれない」

中庭が急にざわついていった。杵だけ残った拱門を抜けて、一台の荷馬車が入ってきた。御者台には萎びた猿のような小柄な男が座っていた。荷台には白木の棺桶が一つ載っている。

「マーシュナーが帰ってきたぞ！親分をお呼びしろ！」

誰かがそう叫んだ。中庭の真ん中で止まった馬車のまわりに男たちが集まってきた。

「あれは手に入ったのか！」

「へへ、そう急くなってことよ！」

マーシュナーと呼ばれた小男は馬から下りる降りと、黄色い乱杭歯をむき出しにして笑った。足が悪いらしくひと足ごとに体が傾いた。

奥の部屋からブランディギロンが現れた。小男の来訪はよほどの大事らしく、イヴォーンには気付かずに馬車の方へと向かった。

「マーシュナー、首尾はどうだ！」

青組の首領は中庭中に響く声で小男に尋ねた。

「へい、上々でございます。お眼鏡にかなう、いやさ、それ以上の代物を調達してまいりました」

猿のような男は自慢気にそう言つて、汚い歯を見せてにやにやと笑つた。

「よし、早速披露してくれ！」

マーシュナーは不自由な足を器用に使つて荷馬車の上によじ登ると、棺桶の蓋を打ち付けている釘を引き抜きにかかった。外した蓋を放り投げると、棺の中から黒光りするものを重そうに引っぱり上げた。

「これをゲスリンに作らせるのに二月もかかりました。親分からお預かりした金貨も一枚も残っちゃいねえ」

小男はにたと笑い続けた。

「能書きはいい加減にしろ！さっさとその力を見せるんだ！」

マーシュナーは笑つてうなずき、まわりのやくざたちに手伝わせて何やら準備を始めた。幾つかの金物の棒を組み立てて、黒いものをその上に据え付けた。それは長さが四イート（約一・二メートル）ばかりの筒状の形をしており、先端らしきところからは鏃が飛び出している。真ん中あたりに薄い箱形のものが突き出し、後ろ半分は幾つもの部品が組み合わさって凹凸の多い複雑な形になっていた。

三十イート（約九メートル）ばかり離れたところに壊れた卓子が立て掛けられた。マーシュナーは筒状の機械の後ろに立ち、取っ手のついた鉄の輪をぎりぎりと言を立てて何回も回した。

「よし、やれ！」

ブランディギロンが命令を下し、小男は今度は鉄の棒を引いた。大きな破裂音と金物が擦れ合う音が、走る馬の蹄の音よりも速く聞こえた。的の卓子には掌ほどの短い金物の矢が十本ばかり突き刺さっていた。卓子の分厚い板は一瞬の間を置いて、二つに割れて倒れた。

青い胴衣の首領は分厚い掌を打ち合わせ、喝采した。

「そうだ！これが俺の欲しかったものだ！でかしたぞ、マーシュナー！ペイズ金貨三枚はお前のものだ！」

猿のような小男は、一瞬不服そうな面持ちを見せたが、すぐにお追従笑

いになり一緒に手を叩いた。

「へへ、このゲスリン式機械弩弓さえありや、赤犬どもなんて瞬きする間に皆殺しでさあ！」

やくざ者たちは歓声をあげ、抜いた剣を打ち鳴らした。私は眉根を寄せて騒ぎを見ているイヴォーンに尋ねた。

「今夜は神殿に行くのか」

「行かないわ。ひどい殺し合いになるから、ここで待つてろつて」

「なら、ここを抜け出し〈黒檀と黄金〉に行つて待つんだ」

「今度こそ、ほんとにこの町から連れ出してくれるんでしょね！」

「ダムンファンの神様にでも祈つてゐるんだな。奴らが騒いでいる内に戻った方がいい。さもないと烙印が増えるぞ」

イヴォーンはなおも恨みがましい目で私に視線を残しながら、立ち去った。ブランディギロンは子分どもに今夜のことについてあれこれと指示を始めた。私もさり気なく近寄つて、聞くことにした。さしたる作戦があるというわけではなかった。満月の夜に本当はどんなことが起こるのか、誰も知らないのだから。

「客人、お前は腕が立つ。ゲスリンの棺桶を守れ。大切なお供え物だからな、絶対に守らにゃならん」

ブランディギロンは口元に皮肉な笑いを浮かべながら、鋭い目つきで私を睨め付けた。どうせ、どさくさに紛れて私を斬れと誰かに命じてあるのだろう。

「間違つて僕を撃たないようにしてくれよ」

私は猿に似た小男に言った。マーシュナーは黄色い歯を見せて、にやにやと笑うだけだった。

「あの腐れ坊主の辛気臭い説教を聞くのも今夜が最後だ。いいか、お宝さえ手に入りや、何も遠慮はいらねえ！坊主も神殿も焼き払え！」

首領の煽る声に、やくざたちは山刀を突き上げて威勢のいい声を上げた。

やがて、赤い落日の最後の光がパラシアン山の山並みの向こうに消えた。銀砂をまぶした空が紺青から漆黒へと変わる頃、白銀の円盤が上った。歪んだ陰気な鐘の音が聞こえてきた。しばしの間を置いて、斥候に出ている男がラスヴィップ一党が出発した報せを持ち帰った。

「行くぞー赤犬野郎といかれ坊主に目にも見せてやれ！」

青い胴衣の首領が怒鳴り、騎馬の男たちに六つの棺が積み込まれた荷馬車が続いた。棺には前日の夜襲で死んだ者たちの骸が入っている。一つを除いてはだ。

壊れかけた迫持の下でイヴォーンが一行を見送っていた。松明の明かりが作った深い影の中で、鳶色の瞳が鈍い光を宿して私を見ていた。

9

ダムンファンの神殿にはすでに紅巾の男たちが到着し、左側の席を占めていた。会堂の真ん中の通路には十以上の棺が三段に積まれていた。車付きの壇の上には、刀傷のある鉛色をした骸が三つ、折り重なって載っている。窓も玄関も開放されていたが、建物の中には死臭が充満していた。

「すまん、悪いが清浄の園に届ける供物が多くてな」

前の方の席から振り返り、ラスヴィップが低い声でそう言った。

「ああ、大層な信心ぶりで結構なことだ」

ブランディギロンはそう返すと、棺を荷車に載せたまま、会堂の入り口に付けるように命じた。私は数人の者たちとともに棺桶の前、会堂の戸口に陣取った。青組のやくざ者たちは右端の狭い通路を通つて、長椅子に座った。説教台にはまだダムンファンの姿はなかった。会堂の高窓から冴えた月光が差し込み、無人の説教台を照らしていた。

破れ鐘が鳴った。月が隠れたわけでもなく、燭台の火が消えたわけでも

ないのに、急に会堂の中が暗くなったような気がした。いつの間に入ってきたのか、気がつくと言教台の向こうにダムンファンがいた。

艶のない黒い長衣をまとい、冴えた月光を浴びた顔は骨のように白かった。黒い眼窩の中になお黒い瞳が光っていた。

「今宵このめでたき復活の祭儀にかように多くの傷つきし靈魂が捧げられしことを、古の大いなる神に感謝いたす……アヴォム、ウサマ、ナクレ、アヴォム、ウサマ、ナクレ……」

ダムンファンは会衆など眼中にないかのように、しわがれた、しかし力のある声で喋りだした。

「コレピオートウル、ガサマ、マカピチューナ、シュチャナルクーント、エスマ、オセ……見よ、古の光輝ここに再びの鼓動を始めんとす……聞け、汚れし肉の引き裂かれし音と流れ出する汚濁の血の音を……バスカヌ、ゴルザニユ、フランカヌ、コレピオートウル、コルンバーニユ、エスカ！」

赤と青のやくざ者たちは頭を垂れて唱和したが、声には固さがあり、控えめに頭を持ち上げて、祭司の様子をうかがい見る者もいた。ダムンファンは何も意に介さぬように祭儀を続けた。

「ルナールテ、フルマン、エスト、ドスキ、コレピオートウル……今宵、月と星辰に靈妙なる力満ち、古の光輝、アヴォムに祝福され再びの鼓動を始める……」

黒衣の祭司は懷の器から赤い粉のようなものを取り出すと、死体の上に振りまいた。刺すような異様な臭気が戸口にいる私にまで届いた。前列では咳き込む者もいる。続いて祭司は青い粉も振りまいた。死骸から白い煙が立ち上り、今度はひどく甘ったるい臭いが広がった。

「エヴァ、コレピオートウル、スマ、ティチュルクアン……聖なる白銀の鍔と黄金の針が汝等を罪惡の園より救い出す……エヴァ、コレピオートウル、タマ、ティチュルクアン……古の光輝、地上の罪惡を清め、永遠の清浄の園をすべての靈魂に与えん……」

ダムンファンは金色の鐘を鳴らした。鳴り止んでいたかと思った破れ鐘がその音色に答えるかのように低く響き出し、会堂の中に波打つような、渦巻くような響きを作りだした。

やくざ者たちの頭がゆっくりと回リだした。何人かは頭を振ったり、拳で叩いたりして、その奇怪な誘惑に耐えようとしているようだった。私は会堂の中から目をそらし、冷たく光る満月に目をやった。少しは頭がはつきりするかと思つたが、異様なぎらつく月光は目を刺し、脳味噌にまで突き刺さるかのようだった。

神殿の中に視線を戻すと、祭壇の背後の扉が開かれていた。冷たい湿った風が吹いてくる。ダムンファンは三つの骸の載った台を車輪を軋ませながら、扉の奥の暗い通廊に押して行つた。

会衆の視線がいっせいに通廊の奥へ集まつた。か細い灯火に照らされて、何かが光つたように見えた。重いものが落ちる音、引きずる音が聞こえた。

ごろごろと音を立てて祭司が空になった供物台を押して戻ってきた。

「三人の靈魂は神の御技にて清浄の園へと旅立つた……エヴァ、コレピオートウル、タマ、ティチュルクアン……次なる苦惱せる靈魂の肉器をこれに」

ダムンファンは誰に向けてというでもなく、宙に彼の命を聞く使い魔でもあるかのように、指図した。赤い布を巻いた男たちが並んでいる棺を開き、次の死体を壇に寝かせた。

黒衣の祭司は同じように唱句を唱え、赤い粉と青い粉を振りまき、また通廊の奥に骸を運んでいった。同じことが何度も繰返された。通廊の奥で光るものが動いているような気がした。コルデの言うように腕のようなもの蠢いているような気もした。だが、暗すぎてはつきりとはわからない。

空になった棺は左脇の通路へ寄せられ、ラスヴィップの用意した棺は残り一つとなった。中から運び出されたのはブランディギロンの配下の男

だった。青い胴衣の下の腰帯がほどけてだらんと台から垂れ下がっていた。その先を始末しようとした紅巾の男が、手先で何かしたように見えた。

私は荷車の上の棺桶を軽く叩いた。覗き穴からマーシユナーの声がした。

「ち、ここからじゃ何にも見えねえ。親分からの合図はあったのか」

「まだだ。だが、用意するんだ、死にたくなかったら。奴らも何かやる気だ」

棺桶の中からの返事は半信半疑といった風だったが、それでも棺の中からがたごとと音が聞こえて、小男が何か始めたのはわかった。

「ルナールテ、フルマン、エスト、ドスキ、コレピオートウル……」

ダムンファンがこの日何度目かになる屈辱な唱句を口にした。赤い粉、青い粉が順番に振りまかれ、異様な臭気が立ち昇った。前列にいるやくざたちは、口を押さえたり、顔を背けたりして、その臭気を吸い込むまいとしていた。幾人かぐったりと頭を垂れている者もいた。奇怪な香氣に毒されたのか、繰り返される呪文のような唱和に耐えきれなくなっているのか。

祭司は骸の載った台を押して、暗赤色の扉の方へ足を進めた。暗い穴蔵の奥から冷たい風が吹き込んできた。腐肉と黴の悪臭に加えて、もう一つ別な臭いが混じっていた。

「祭司様！私を清浄の園へ！」

突然、紅巾を頭に巻いた一人の男が狂気じみた叫びを上げ、台上の骸に身を投げた。

「カナッチョ！馬鹿な！」

赤組の誰かが怒鳴った。

「火薬だ！伏せろ！」

私の警告よりもはやく、紅巾のやくざたちは一斉に椅子の背もたれに頭を隠した。最前列にいた者たちは左端の通路へ走り棺桶の後ろに回った。

一瞬遅れて青組の男たちが身を伏せた。

どんつという音がして爆発が起こった。火薬は死骸の腹に仕掛けられていたのだ。湧き上がる炎と煙の塊とともに、赤黒い臓物が四方八方に飛び散る。もうもうたる煙の中に黒衣の祭司が倒れるのが見えた。

「行くぞー！」

低く鋭い声はラスヴィップのものだろうか。黒煙に包まれた祭壇に抜き身を下げた赤い布の男たちが殺到した。

「くそ！赤犬め！野郎ども、怯むな！マーシユナー！」

硝煙に咳き込みながら怒鳴り散らしているのはブランディギロンだった。どうやら無事だったらしい。それに応えて、青組のやくざたちが立ち上がったが、何人かは血にまみれて動かなかった。

「出番だぞー！」

私は荷車についていた数人のやくざたちと一緒に棺桶の蓋を取り払った。

「おう！臭え仕掛けをしやがって赤犬野郎め！」

マーシユナーは棺の中に機械仕掛けの弩を据え付けて、操作桿を握った。

「くそ！煙でよく見えねえ！親分はどこだ！」

説教台のあたりはまだ爆発の煙におおわれていた。その中で赤組と青組の乱戦が始まっている。白刃が硝煙を裂いて鋭く動き、斬られた者の叫びが聞こえる。

その中から大きな人影が飛び出して来た。

「マーシユナー、何をしてやがる、撃て！撃つんだ！」

ブランディギロンが中央の通路をこちらへ走ってくる。

「へい、でもまだ仲間が！」

「馬鹿野郎！撃て！撃って皆殺しだ！分け前が増えるぞー！」

小男が機械弩弓の操作桿を動かそうとしたその刹那、恐ろしい声が響き渡った。

「エク、メクス、テグザコーバ、コアトケチュア……古きもの、古よりの光り輝くものを畏れぬ、愚蒙の衆よ……」

ひどく歪んだ破れ鐘の音のような声だった。人間の喉から出る声とは思えなかった。

煙の帳が誰かが左右に引っ張ったかのように開き、黒と赤の斑模様の人影が現れた。ずたずたに裂けた黒い頭巾の中の顔は鮮血滴るぼろ肉の塊のようだった。爆発で肉が焼け焦げた部分が黒い不気味な斑点となっていた。ジクロイスの十字を刺繍した黒衣には大きな赤い染みが浮かび、じくじくと血が流れ出している。カナツチョという男の捨て身の信心も祭司を守ることはできなかったようだ。

だが、いかなる法力によるものか、あるいは度を越えた信心のなせる技か、それでもダムンファンはしっかりと立ち、裂けて血の滴る唇から恐ろしい呪詛の声を発した。

「聖なる白銀の鍔と黄金の針が、汝等の靈魂を岩と砂と飢えと渇きの地獄へと連れ去る……エク、メクス、ケルボザウーザ、コアトケチュア、コレピオートウル、オルラ！オルラ！コレピオートウル！」

祭壇のまわりにいた赤と青のやくざたちは一瞬たじろいたが、すぐに最も現実的な策を実行に移した。無数の刃が祭司に殺到し、突き刺し、斬り裂いた。血飛沫が上がり、肉かはらわたかの欠けらが飛び散った。

「いつまでも、てめえの気狂い説教に付き合えるかよ！」

叫んだのはラスヴィップだった。赤組の首領は祭司に突き刺した剣を挟るように動かしながら、そう叫んだ。

次の刹那、ラスヴィップは雷に撃たれたかのように弾き飛ばされた。彼だけではない、ダムンファンのまわりにいたやくざたちは、一人残らず十イート（約三メートル）も弾き飛ばされ、会堂の長椅子に叩きつけられた。「エク、メクス、ケルボザウーザ！すべての人は罪人、すべての人は光輝の神の贄、この世のすべての人よ、古の光輝の神の贄となれ！コアトケチュア、コレピオートウル！オルラ！オルラ！コレピオートウル！オルラ！」

人間のものとは思われないおぞましい声が響き渡った。ダムンファンの体は幾振りもの剣を突き立てたまま、二イートばかりも宙に浮いていた。血みどろのぼろのような姿になったまま、空中から呪詛の詠唱が続いていた。

「ああ、祭司様！祭司様は本当に神様のお使いだ！ああ！すまねえことをしてしまった。俺を、俺を清浄の園へ連れていってくれ！」

狂乱するままにわめいているのは青い胴衣を着たヴォークという男だった。青組の中でも地位は高い方だろう。

「俺も清浄の園へ行きたい！」

「祭司様、お助けを！お助けを！」

「もう、やくざ稼業はうんざりだ！お助けを！」

赤青を問わず、何人ものやくざたちが祭司の前にひざまずき、悲痛な哀願を繰り返した。

「くそ！ヴォーク、狂ったか！あいつは化け物だ！マーシュナー、撃て！撃つんだ！」

入り口近くまで逃げてきた青組の首領がわめいた。その上ずった声には恐怖が黒い影を落としていた。

「へ、へい！」

マーシュナーは機械弩弓の操作桿を引いた。激しい金属音が太鼓の連打のように起こって、黒い筒先から鋼鉄の矢が立て続けに放たれた。小男は台座の上の弩弓を左右に動かした。続けざまに放たれる矢が、祭司を取り囲み泣きながら哀願する者たちに突き刺さった。

血煙が上がり、赤組の男たちの紅巾をさらに赤く染め上げた。青組の男たちは青い胴衣を血でどす黒く染めて死んだ。ガスリン式弩弓の斉射が止んだとき、説教台の周囲に普通の意味で生きている者は一人もいなかった。

ダムンファンだけは別だった。連射される鋼の矢の衝撃で壁に叩きつけられ顔れたかに見えたが、弩弓が動きを止めるとまるで操り人形のように

に身を起こし、再び宙に浮いた。

「オルラ！オルラ！コレピオートウル！オルラ！オルラ！」

どす黒い血をどくどくと吐きだし、何十本もの矢を突き立てたまま、黒衣の祭司は恐ろしい声で呪文を唱え続けた。

「貸せ！あの化け物は俺が殺る！」

ブランディギロンがマーシュナーを押し退け、操作桿を握った。小男は慌てて、次の矢箱を機械に装填した。

「親分、あんまり乱暴に扱っちゃいけませんぜ！こいつあ、結構気難しい奴なんです」

「馬鹿野郎！機械のご機嫌取りをしろつてのか！」

青い目を憎悪と恐怖にぎらつかせて、ブランディギロンは弩弓をダムンファンに向けた。

その時、祭司の背後で、暗い通路の中で、何かが動いた。冷たく湿った異様な臭気がどつと吐き出され、虹色に光る長い棒状のものが何本も迫持型の戸口から突き出された。

それは巨大な虫の脚のようだった。鋸の歯のようなぎざぎざがついており、長さは突き出している部分だけで、六イート（約二メートル）はあった。透き通った水晶のようなもので出来ており、中では七色の宝石のような光が蠢き明滅していた。

脚の先端には鉤型になった大きな銀色の鉄がついていた。それは宙に浮いたまま、まだ呪文を唱えているダムンファンの体をつかむと、一気に四方に引き千切った。血と肉と臓物があたり一面に飛び散った。その瞬間、黒衣の祭司は血まみれの顔に狂った笑いを浮かべた。

十五イート（約四メートル半）はある迫持型の戸口を内側から崩しながら、脚に続く部分が姿を現した。それは蠍と蛇の合の子のようにも見えた。頭と呼べるような部分はなく、幅広の胴体の先端に人間を丸のみできそうな口が大きく裂けたように開いている。長い無数の尖った歯から、どす黒い血が滴っていた。口の上には巨大な琥珀か黄玉のような輝く目玉

が蜘蛛のように幾つもついていた。

体節のある胴からは、銀の鉄のある脚が出鱈目な角度で何本も生えている。胴体も水晶のように透明で、中では幾つもの虹色の塊が不規則に収縮したり、流れたりしていた。赤黒く見えるのは、清浄の園へ行つたはずのやくざ者たちの頭や手足の欠けらのようだった。

胴の先には蠍のように上方に反り返った尾があり、膨れた先端には金色に光る一イートはあろうかという針がついていた。針の先からは毒液なのだろうか、薄緑色の液汁が滴り落ちている。尾には虫のような節はなく、蛇のように滑らかに自在に動かせるようだった。尾の中にも虹色のもが見えたが、先端の針の方へ行くに従って緑色が強くなっている。

この虹色に輝く化け物こそがお宝だったのだ。ジャクレン教徒が来るよりも、銅山が出来るよりもはるかな昔には、残酷な神として崇められていたのだろう。生贄も存分に捧げられていたのかも知れない。神殿裏手の大きな窪地はこの怪物の棲処だったのかも知れない。ダムンファンの求めた葬儀、清浄の園に行くための儀式は、能う限り新鮮な供物を捧げるためのものだったのだろう。

「くそ！何だこいつは！この化け物は！これがお宝か！ふざけやがって！」

ブランディギロンはゲスリン弩弓を発射した。鉄の馬が疾駆するような轟音が鳴り響き、無数の矢が虹色の怪物へ殺到した。

矢は怪物の全身へ突き刺さった。水晶のように透き通った体に黒い鉄の矢は深々と食い込み、光る臓物のようなものへ達した。怪物は動きを止めた。長い節のある脚が力なくのび、蛇のような尾が背中下垂れ下がった。

「ざまあ見やがれ！おい、死体をばらせばお宝になるかもしれねえ。誰か行って様子を見てこい！」

青組の首領は唾を飛ばしてわめいたが、生き残りのやくざたちは誰も動こうとはしなかった。

「ターラス！お前が行け！分け前ははずんでやるぞ！」

指名された若いやくざは青ざめた顔で首領の顔と怪物の顔を見比べていたが、怪物の中の七色の光が弱まってきたと見るや、恐る恐る祭壇の方へ進みだした。

「う、何て臭いだ！」

ターラスは片手で口を押さえながら、握った山刀でぐったりとした怪物の脚をつついた。巨大な虫のような脚は動かなかった。

「動きませんぜ！こいつぁ、くたばってますぜ！」

「その忌々しい脚を一本叩つ斬ってみろ！」

若いやくざは山刀を振り下ろした。頑丈な刀身が透き通った脚に食い込んだ。

その時、力なく垂れていた怪物の尾がわずかに動いた。ターラスがもう一度刀を振り上げたとき、その頭上に金色の尾針が素早く振り下ろされた。巨大な針はやくざの脳天を貫き、血と緑色の液が入り交じったものが飛び散った。毒液が注入されたのか、あつという間に若いやくざの顔は鉛色に変色し、目と鼻と口と耳から、どくどくと黒い血が流れ出した。

銀の鍔が哀れな男の手足を挟んで、ばらばらに引き裂いた。血みどろの死体は大きな口の中に運ばれ、肉が裂け骨が砕ける音がした。赤い塊が透き通った体の中を動いていくのがわかった。

怪物の体からゆっくりと矢が押し出されてきた。赤い血の代わりなのだろうか、透明な溶けた鉛のようなものが傷口からじくじくと流れ出した。矢が完全に押し出されると鉛のような体液は固まり、傷跡は見えなくなった。再び脚や尾が力を持って動き出し、怪物は祭壇のまわりの死体を踏み越え、こちらへ向かってきた。

会堂の前の方にいたやくざたちは、恐怖に顔色をなくして、紅巾の者も青い胴衣の者も出口へ向かって走り出した。

「くそ！マーシュナー、矢箱だ！さっさとしろ！」

小男は首領の命令に恐る恐る異を唱えた。

「親父、逃げた方がいい。こいつは矢箱二つ使ったら、様子を見ねえと危ねえんだ。ゲスリンがそう言ってた！」

「ふざけるな！さっさと言われた通りにしろ！さもないとあの毒針の下に貴様を投げ飛ばすぞ！」

猪面のやくざは小男の襟をつかんで締め上げた。マーシュナーは洪々矢箱を機械弩弓に装置したが、荷車から降りるとじりじりと後退った。

「今度こそ息の根を止めてやる！喰らえ！」

ブランドイギロンはもう二十イート（約六メートル）ばかりに迫った怪物めがけて、鉄の矢を放った。三度目の轟音が響いたがこれまでとは違う甲高い音が入り交じっていた。会堂の入り口は荷車にふさがれていたの
で、私は左端の長椅子の陰に飛び込んだ。

金属の擦れ合う物凄い音がしたかと思うと、大きな破裂音が轟いた。ゲスリン式機械弩弓はばらばらになって吹き飛んだ。

短い悲鳴とともにブランドイギロンの巨体が荷車の上から弾き飛ばされて、私の隠れていた長椅子の上に叩きつけられた。血みどろの顔から腹へかけて無数の黒い金属の部品が突き刺さり、食い込み、人間と機械が融合したかのような奇怪な姿となっていた。熱く焼けた金属の欠けらが肥えた白い体に無数の烙印を押していた。

怪物は何本もの矢を突き立てたまま、暴れ回っていた。琥珀の目の幾つかが潰れて透明な液汁が滴っていたが、気にする気配はなかった。鉤型の鍔でやくざたちを引き裂き、巨大な毒針で突き刺し、ぼろ肉のような骸に変えていた。

近くの床の上で誰かがうめいていた。見れば赤組の頭目ラスヴィップが数イート先に倒れていた。左肩の傷口が開いたのか、夥しい血が流れ出しており、太股にも機械弩弓の矢が突き刺さっていた。出血のためなのだろう、浅黒い肌が奇妙に青白く見えた。

ラスヴィップは苦痛にうめきながら、側にある空の棺から拳大の黒い塊を取り出した。懷から引っ張り出した煙草用の火種で、塊から出ている短

い紐に火をつけようとした。

「それで怪物を吹き飛ばす気か」

血にまみれた顔で赤組の首領はこちらを見た。痘痕面に凄みのある笑いを浮かべた。

「ほう、客人、生きてやがったか。ああ、そうよ。これで化け物めを粉々にしてやる！貴様も一緒になー！」

火縄から煙があがった。ラスヴィップは傷の痛みに顔を歪めながらも身を起こし、黒い塊―火薬玉―を怪物に投げつけようとした。

私は火薬玉を握った奴の右手に斬りつけた。爆薬を握ったままの手首が血飛沫を散らしながら宙を舞った。私はそれを受け止めた。火縄にはまだほんの少しだけ余裕があった。

「き、貴様！」

「お前と心中する気はない。それに女を痛めつける奴は嫌いなんだ。趣味の合う青い兄弟はもう死んだ。お前も後を追うといい。清浄の園とやらでまた殺し合いができる」

ラスヴィップはひどく不満げで何か言いたそうだったが、最後の台詞を吐く前に私は奴の心臓に剣を突き刺した。

私は会堂の横手の細長い窓を打ち破り、何とか外へ体を押し出した。虹色の怪物めがけて、火薬玉を投げつけると地面に身を伏せた。

一瞬の間を置いて、爆発が起こった。爆音と熱風が体の上を走り抜けた。壁土の欠けらか焼け焦げた死体の欠けらか何かが、降り注いだ。

身を起こすと、会堂の窓からは弱い朱色の光と薄い煙が吹きだしていた。私は爆発の効果を確認めようと中を覗こうとした。その時、次の爆発が起こった。窓から炎が噴き出すより、一瞬はやく身を伏せた。髪の毛がちりちりと焦げるのがわかった。私はそのまま地面を這って、できるだけ会堂から離れようとした。三度目、四度目の爆発が立て続けに起こった。ラスヴィップは棺桶の中に爆薬を幾つも隠しておいたらしい。

ようやく立ち上がって振り返ると、ダムンファンの神殿は紅蓮の炎に包

まれていた。傾いたジクロイスの徴をつけた鐘楼が、ゆっくりと崩れ落ちた。衝く者もないはずの破鐘が、陰鬱な大音響を夜空に轟かせたのは、偶然のなせる技なのだろうか。

月光を掻き消す朱の炎の中に、時折爆ぜるように虹色の輝きが見えた。舞い上がる火の粉の中に七色の煌めくものが混じり、中天の月へと吸い込まれていくように見えた。

10

逃げ惑っていた馬を一頭つかまえて、私は〈黒檀と黄金〉に向かった。背後では時折まだ火薬の爆発する音が聞こえた。

町の中に入ると、不安げな顔をした人々が露台や玄関先から赤く染まった夜空を見つめていた。

〈黒檀と黄金〉は何やら賑やかだった。扉を開く前から金切り声とばたばたという音が聞こえてきた。中では黒髪と金髪の女が恐ろしい形相でにらみあっていた。

「この雌豚め！あんたがあのでぶをつかまえてかないから、あたしまで焼き鋲押されたのよ！」

「ふん！嘘つきの雌犬！あっちにもこっちにもいい顔してるから、そんな目に遭うのよ！」

帳場の向こうではルッカがうんざりした顔で銅杯を手にはしていた。私と目が合うと彼女たちのかつての雇い主はぼやいた。

「おう、良かった。生きて戻ってきてくれたか。店を壊し始める前に、早いところこの二人をどっかに連れてってくれ」

二人の酒場女は同時にこちらを見るとわめき始めた。
「ランケン！私と町を出てくれるって言ったわよね！」

イヴォーンが赤い爪で私の左腕をつかんだ。

「ランケン！私を連れて逃げるって言ったでしょ！」

コルデが青い目をぎらつかせて私の右腕をとった。

二人の女は目を合わせると、間合いを計ったかのように私に平手打ちを食わせようとした。私は身を反らしてよけて、二人の手首をつかんだ。

「やくざたちはみんな死んだ。ダムンファンの神殿は燃えている。お宝なんてなかった。宝石みたいに光る化け物がいただけだ。奴も多分焼け死んだだろう。町を出たかったら、二人ともさっさと支度をして馬車に乗るんだ。それとも、ここで永遠に喧嘩を続けるつもりか！」

女たちは不満げな目つきでお互いと私の顔を交互に見ていたが、示し合わせたように同時にうなずいた。

「わかったわ！次の町までならこのあばずれに我慢するわ」

「わかったわよ！一駅くらい尻軽女に辛抱してあげるわ」

二人の女は私から離れると、乱れた服を直し始めた。

「ルッカ、あんたはどうする」

店の主は銅杯を振って、疲れた笑みを浮かべた。

「俺はここにいるよ。やくざどもがいなくなれば、少しは町もましになるだろう。居酒屋がなくなっちゃって、町の連中も困るだろうしな」

「そうか、世話になったな」

「いや、礼を言うのはこっちだ」

ルッカは古い幌付きの荷馬車を用意してくれていた。私は御者台に座り、女たちはルッカの両頬に別れの接吻をした。

「達者でな」

「うん」

「あんたもね」

二人の女はかつての雇い主にそれなりに恩義と親しみを感じてはいるらしかった。

二人は馬車に乗り込み、昇り始めた朝日を背にして、私たちは西へ向かった。陽が昇りきった頃、幌の中から罵りあう声と取っ組み合いの音が

聞こえてきた。

私は馬たちを急がせることにしたが、次の町はまだ遠かった。